筑前国続風土記

『筑前国続風土記』は、江戸時代に福岡藩で作成された筑前国の地誌です。著者は福岡藩儒・貝原益軒で、その編さん作業には甥の好古や、高弟の竹田定直が加わりました。元禄元年（1688）より作成に着手し、同 16 年に一度完成、４代藩主・黒田綱政に上呈しますが、その後更に改訂を加えて、宝永６年（1709）に完成しています。国内の村々を廻る堅実な実地調査と、実証に基づいた内容で、当時の筑前国内の状況が詳しくうかがい知れる、現在でも有用の書です。のちに江戸幕府も諸藩に地誌の作成を奨励するなど、全国的に作成された近世地誌ですが、和文遣いや本文の記載方法など、『筑前国続風土記』はその手本となった事でも知られています。

江戸時代にもその写本が流布した『筑前国続風土記』ですが、ここで紹介するのは、竹田定直を祖とし、代々福岡藩儒をつとめた竹田家に伝わる資料です。昭和 46 年（1971）に竹田家より福岡県文化会館に寄託され、現在は福岡県立図書館が保管する「竹田文庫」の一部で、福岡県有形文化財に指定されています。

その内容は、「提要」２巻、福岡・博多および国内 15 郡（那珂・席田・御笠・夜須・上座・下座・嘉麻・穂波・鞍手・遠賀・宗像・糟屋・早良・怡土・志摩）の記 21 巻、「古城古戦場記」５巻、「土産考」２巻、の全 30 巻。および竹田文庫本では巻 31 を「拾遺」として添えています。これは他本にない特徴です。「提要」上下２巻は、自序および筑前国の歴史的概観、各郡高や戸数・人口など統計資料、河川・山野などの地理的概観を載せます。福岡・博多の各巻では、福岡城や城下、また博多と各町・寺社の歴史と現状について、諸郡では、郡内村々の勝地や名所旧跡、寺社を中心にその歴史や由緒が記述されています。「土産考」は、醸造類・製薬類・土石類・禽鳥類・河魚類・海魚類・海藻類・樹木類などについて、産地・採取方法や特質を述べています。

この竹田文庫『筑前国続風土記』の書中には、「竹田定直校正」のほか、所々に校訂の跡があり、竹田定直がその制作に関わっていた事がうかがえます。定直最後の校正本といわれ、定本に最も近いと考えられる資料です。なおその清書は、『筑前早鑑』や『筑前旧跡記』を著した福岡藩士・末永為順（虚舟）によるものです。

九州歴史資料館学芸員　一瀬智

上記は平成２６年３月現在の内容（記述）です。
竹田文庫は令和５（２０２３）年３月に大野城市へ寄贈されました。